

日本語受身文とその中国語対訳文の対照研究：「動作主なし」の直接受身文を中心に

梅, 佳
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/1430885>

出版情報：比較社会文化研究. 35, pp. 53-60, 2014-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



日本語受身文とその中国語対訳文の対照研究

—「動作主なし」の直接受身文を中心に—

梅

佳

1. はじめに

- 1) 曾根二郎は言われるままに風呂をもらってはい
ることにした。(あした来る人)
- 1)' 曾根于是按主人の吩咐, 決定洗个澡。
- 2) 「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力の御
蔭ですね」(こころ)
- 2)' “这么说, 被杀的人, 也是沾了非自然暴力的光啦。”

以上の日本語原文はみな受身文を用いて出来事を表わしている。しかし、対応する中国語の訳文を見ると、それぞれ能動文、受身文に訳されている。つまり、日本語の受身文を中国語に訳す時、必ずしも受身文に訳すとは限らない。両言語における受身文の対応性は中国人日本語学習者にとって、理解しにくいものとなっている。いかに日本語受身文を正しく訳すかは中国人の日本語教育や翻訳研究における重要な課題である。

したがって、本稿は実例研究という研究方法を用いて、文学作品においてよく用いられる日本語受身文およびその中国語の対訳文を中日対訳コーパスから取り出し、対照的な分析を行い、両者の表現の相違を明らかにした上で、日中受身文の対応性を考察してみる。

2. 先行研究の概観

日本語受身文または中国語“被動句”の問題は昔から注目を集めており、それについて多くの研究が行われた。以下では、日本語の受身文に関する研究、中国語の“被動句”に関する研究および日中対照研究を概観する。

まず日本語の受身文に関する先行研究を見てみると、受身文の概念、形態的特徴、分類、成立する条件について主に構文上と意味上という二つの面からの研究が数多くなされている。

受身の概念について、寺村(1982: 212)は「受身というのは、要するに、動作作用の主体が、他の何ものかに働きかける場合に、動作主、つまり動きの発するところを主役とするのではなく、動きを受けるもの、動きの向

かう先を主役として事態を描く表現である」と述べている。

また、寺村(1982)、森田(1990)、松村(1971)、阪田(1980)は日本語の受身の意味的特徴と構文的特徴(主語と動作主両面から)およびそれらに基づく分類に関する研究を行った。これらの先行研究では、主語の影響の受け方を中心に論じた研究および受身の意味機能、つまり受身文が利害の感情を伴うかどうかという研究が主流であった。

次に、中国語の“被動句”に関する研究を簡潔にまとめる。

中国語における“被動句”についての研究は日本語と類似したところが多く、主に受身文の定義、分類法、意味と構文についての研究が行われてきた。

劉他(1983, 2004)は、中国語の受身文は受身を表すマーカーのないものの“意義被動句(意味上の受動文)”とマーカーのあるものの“被字句(被構文)”の2種類があると指摘し、例文を用いて「意味上の受動文」と「被構文」について述べている。陳(2000)は、同じ分類をして、さらに“被字句”と“意義被動句”それぞれの意味的特徴、構文的特徴について述べている。意味的には、“被字句”はほとんどが主語から見て不愉快あるいは被害的な事柄を表す。“意義被動句”は事柄の客観的な事実を中心に述べ、受身の意味は薄いことが分かった。

最後に、日中受身文の対照研究を紹介する。

受身文の日中対照研究を見てみると、理論上の研究は実例に基づいた研究より多く見られる。理論上の研究は主にある方面から両言語の受身文を比較したものである。

理論上の研究として、大河内(1982)は、中国語受身文の特徴について考察した上で、構文上と意味上から日中受身の共通点と相違点を指摘している。また、楊(1988)は、構文と語用から、日中両言語の受身文の対応性を考察した。

実例に基づいた研究では、葉(2003)は日本語の受身文の特徴や意味を説明しながら、中国の大学日本語教材として使われている『新編日語』における受身文の分類法について分析し、日中受身文の対応性を考察した。しかし葉(2003)は日本語の例文を中国語に訳したとき中

国語では受身文になるかどうかだけを考察し、中国語の受身文と対応していない日本語の受身文がどのような中国語構文と対応しているかについては全く触れられていない。姚（2002）は葉とほぼ同様に、日本語の受身文が中国語の受身文と対応しているかどうかを絞って訳文を用いて研究しているが、日本語の受身文と他の中国語構文との対応関係には触れていない。飯嶋（2007）は、日本語の受動表現と中国語の対応関係を網羅的に研究しているが、論説文の中の日本語受動表現に限っている。

したがって、本稿では、実証的な研究方法を用い、日中対訳の例文を研究対象にし、例文分析および考察を通して、日本語受身文と中国語の対応関係を明らかにする。

3. 用例収集

3.1 用例出典

本稿では、日本語小説における受身文とその中国語訳文を調査していく。日本語を原文とし、中国語訳を持つ小説から、受身文の用例を収集した。以下の表1はその出典である。

表1 本稿用例の出典

日本語原文		中国語訳文	
小説名	著者	訳本名	訳者
高野聖（1900）	泉鏡花	高野聖僧（1990）	文浩若
布団（1907）	田山花袋	棉被（1987）	黄凤英
こころ（1914）	夏目漱石	心（1983）	周大勇
雪国（1937）	川端康成	雪国（1998）	叶渭渠
斜陽（1947）	太宰治	斜阳（1981）	张嘉林
あした来る人（1954）	井上靖	情系明天（1988）	林少华
ノルウェイの森（1987）	村上春樹	挪威的森林（2001）	林少华

（北京日本学研究中心（2003）『中日対訳コーパス』第一版による）

3.2 用例統計

調査対象から収集した1511例の受身文を、寺村（1982）の構文上と意味上の二つの視点から、「直接受身文」と「間接受身文」に分類した。また、動作主の有無によって、対応する中国語表現に相違が生じると考えたため、「直接受身文」はさらに「動作主なし」と「主語なし」、「動作主も主語もあり」、「動作主も主語もなし」の4種に分類した。表2はその結果をまとめたものである。

表2から分かるように、直接受身文のうち「動作主なし」すなわち「動作主が不明確、または不問」、「動作主よりも行為の結果に重点が置かれる場合に使用される」という用法の使用数が一番多く見られる。したがって、本稿では、この「動作主なし」直接受身文を対象にし、それに対応する中国語訳文との対照研究を行う。

4. 「動作主なし」の直接受身文に対応する中国語表現

本稿では、「動作主なし」の直接受身文が606例収集された。その中国語の訳され方は、能動文、受身文¹、意

表2 日本語の小説における受身文

受身文 作品	受身文 合計	直接受身文				間接受身文
		動作主なし	主語なし	動作主も主語 もあり	動作主も主語 もなし	
高野聖	49	10	7	10	17	5
布団	63	23	11	6	11	12
こころ	360	133	35	93	77	22
雪国	134	52	16	34	29	3
斜陽	123	40	33	17	25	8
あした来る人	414	188	43	83	83	17
ノルウェイの森	368	160	46	61	89	12
合計	1511	606	191	304	331	79

訳²という三つのパターンに分類された。その結果は次の表3にまとめられる。

表3 「動作主なし」の直接受身文に対応する中国語表現

原文	訳文 能動文	受身文		意識
		「被」 構文	意味上の 受身文	
「動作主なし」 の直接受身文	264	142	137	63

表3を見ると、「動作主なし」の264例(43.6%)が、中国語の能動文に訳され、中国語の受身文(受動マーカーを用いる「被構文」と受動マーカーを用いない「意味上の受動文」)に訳されたのは279例(46.1%)である。以下、「動作主なし」の直接受身文に対応する中国語表現について検討していく。

4.1 能動文に訳された場合

一般的に、ある出来事に対して能動的な表現と受動的な表現どちらを用いてもいい。話し手が行為者に視点を置けば、能動文を選択し、受け手に視点を置けば、受身文を選択する。それは日本語も中国語も同じだと思われる。表3から分かるように、264例の日本語受身文は、中国語の能動文に訳された。つまり、同じ事柄を表わすのに、約4割の中国語訳文は、日本語と違う文型を用いている。また、中国語の訳文を見ると、主語がある能動文が179例あり、主語が明示されていないのが85例ある。さらに、主語のある能動文に訳された用例のうち、日本語の原文の主語がそのまま訳文の主語になったのは61例、訳文に新しい主語が補われ、元の主語が目的語などとなったものは118例である。

4.1.1 原文の主語が訳文の主語に立てられた場合

- 3) 革命は、まだ、ちっとも、何も、行われていないです。(斜陽)
- 3)' 革命还一点也没有进行。
- 4) 私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。(こころ)
- 4)' 我突然吃了一惊，什么话也没有回答。
- 5) 「直子が来てから私は来る日も来る日もビートルズのものばかり弾かされているのよ。まるで哀しい音楽奴隷のように・・・」(ノルウェイの森)
- 5)' “直子来到后，我就日复一日地没完没了地弹甲壳虫，活活成了可怜的音乐奴隶。”

日本語の原文から見ると、主語が抽象名詞あるいは物である場合、動作主が明示されない。文全体は主語の状態や様子を述べ、視点が動作主ではなく、受動者に置かれている。

4.1.2 文脈から判断できる主語を補って主語に立てた場合

- 6) 晚餐後、芳子はその事を問われたのである。(布団)
- 6)' 晚饭后，他向芳子问起这件事。
- 7) 「大丈夫でしょうか。こっちならおこられることはあるまいと思って、杏子は三沢に声をかけた。(あした来る人)
- 7)' “不要紧吧？”杏子问三泽。她估计由自己开口对方是不至于生气的。
- 8) 先生はそれでも、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。(こころ)
- 8)' 先生也是不断地在担心着人家会用冷静的眼光去研究他的。
- 9) 僕は午後外出しなければならぬ。争議の調停を頼まれてね。(あした来る人)
- 9)' 不过我午后要外出，别人托我调解纠纷。”
- 10) 日本劇場の前まで行った時、杏子はふいに声をかけられた。「山名さん」ひどく大きい声である。(あした来る人)
- 10)' 走到日本剧场门前，忽听有人扯着大嗓门叫道：“山名小姐！”

以上は、中国語の能動文に訳されている例である。(6)'は動作主“他(彼)”が主語に立てられ、「彼は芳子に聞く」と訳され、(7)'は動作主“对方(相手)”が主語に立てられ、「相手が怒る」と訳されている。このように、中国語の訳文は日本語の原文内に動作主は記されていないものの、文脈から判断される主語を補って主語を立て、「主語+動詞+目的語」という能動文の構成に組み換えている。また、(8)'、(9)'、(10)'では、(8)、(9)、(10)の原文内には全く存在しない“人家(人々)”、“别人(誰か)”、“有人(誰か)”を補って主語を立て、「人々は先生を研究する」、「誰かが私に頼む」、「誰かが声をかける」と能動文の形に訳している。これは、もともと日本語の原文に動作主が明示されておらず、文脈から不特定多数が動作主と判断されることができると考えられる。中国語訳として、受動文にするのではなく、日本語の原文に示されていない動作主をわざわざ補ってまで能動文に訳している点は、注目すべきである。

4.1.3 訳文には主語がない場合

- 11) 二人の恋の許可不許可も問題に上ったが、それは今研究すべき題目でないとして却けられ、当面の京都帰還問題が論ぜられた。(布団)
- 11)' 是否同意两人的爱情, 这虽然是个问题, 但并不是眼下值得研究的题目, 因而被搁在一边, 眼下主要是讨论回京都的事。
- 12) 芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていた。が、まだ季節が来ないので花をつけているのは一本もなかった。(こころ)
- 12)' 一块十坪多一点的地方上, 种满了芍药, 可是没到季节, 一株开花的也没有。
- 13) 我々がテーブルに座ると、何も言わないうちに朱塗りの四角い容器に入った日変りの弁当と吸物の椀が運ばれてきた。(ノルウェイの森)
- 13)' 我们在桌旁边坐定, 还未等开口, 就端上两个四方形红漆容器, 里边放着每日一换的盒饭和一碗汤。

(11)'、(12)'、(13)'も中国語の能動文に訳されている例である。例文中に示されているように、中国語の訳文では、動作主(主語)は明示されていないものの、「(主語)+動詞+目的語」という、能動文の語順になっている。中国語で主語が記されていないのは、受動者が抽象名詞あるいは物である場合、動作主が人間であることが判断でき、また動作主が特定人物であるはずだが、それが誰か不明であるためであると思われる。文全体としては、日本語原文のように述語動詞が表す動作そのものかその動作の結果に焦点が置かれていると考えられる。

4.2 受身文に訳された場合

中国語の受身文は受身を表すマーカーのあるもの(つまり、有標)の“被字句(被構文)”とマーカーのない

もの(つまり、無標)の“意義被動句(意味上の受動文)”との2種類がある。表3に示したように、「動作主なし」直接受身文が中国語の受身文に訳された場合、被構文が142例、意味上の受身文が137例、それぞれ半分ぐらいを占めている。

4.2.1 「被構文」に訳された場合

中国語の受身文というと、まず「被」字文が思い出される場合が多い。「被構文」は最も典型的な受身文であると言える。「被」のほか、「叫」、「讓」、「給」なども受身文の標識であると言われている。本稿は先行研究にしたがって、標識を帯びる文を総じて「被構文」と言うことにする。

中国語の「被構文」は、「…を被る」という意味を持つ「被」で表されるものである。その意味特徴について、劉月華他(1991)は、「“被”構文」は、主語からみて不愉快或いは被害的な事柄を表すのに用いられるのがほとんどである、と指摘している³。次の例を見てみよう。

- 14) 自分ひとりだけ置き去りにされ、呼んでも叫んでも、何の手応えの無いたそがれの秋の曠野に立たされているような、これまで味わった事のない凄愴の思いに襲われた。(斜陽)
- 14)' 我象是黄昏时被孤独地遗弃在秋天旷野里, 怎么呼喊都没有用, 一种从未尝到过的凄愴感觉不由得涌上心头。
- 15) 「恋愛というようなものは、だまし合いみたいなところがあるからな。現在の立場では、君の方が、結局だまされる方に回るだろう」(あした来る人)
- 15)' “因为恋爱这种东西, 有一种互相欺骗的成份。就眼下情况看, 你怕是要成为受骗一方”

表4 能動文に訳された「動作主なし」の直接受身文の特徴

訳文①(原文の主語が訳文の主語に立てられる)	主語	動作主	文の意味
	抽象名詞/こと	不特定多数 文脈から判断できる	主語の状態や様子を述べる 受身の意味薄い
	物	明示する必要がない	主語の状態や様子を述べる
訳文②(文脈から判断できる主語を補って主語に立てる)	人の動作	文脈から判断できる特定な人	一般叙述文
	人の動作/抽象名詞	不特定多数	影響を受ける人が明示されたり、 文脈から推測できたりする
訳文③(訳文には主語がない)	こと	明示する必要がない /特定でない	一般叙述文であり/ 個別な事実を叙述する
	抽象名詞/物	不特定多数	動作の結果に焦点が置かれている

- 16) 図書館の本も掠奪されることなく、教授室も破壊しつくされることはなく、学生課の建物も焼け落ちてはいなかった。(ノルウェイの森)
- 16)' 图书馆的书没被掠夺, 教授室未遭破坏, 学生科的办公楼未被烧毁。
- 17) ひと互いにおびえ、あらゆる思想が姦せられ、努力は嘲笑せられ、幸福は否定せられ、美貌はけがされ、光栄は引きずりおろされ、所謂「世紀の不安」は、この不思議な一語からはっしていると僕は思っているんです。(斜陽)
- 17)' 人相互感到戒惧, 一切思想都遭到亵渎, 所有努力都受到嘲笑, 幸福被否定, 美貌被糟蹋, 名誉被玷辱, 所谓“世纪之不安”, 我认为都是由这一句奇怪的话引起的。
- 18) 「革命が成就したら、私たち電柱に並んで吊されるのかしら?」。(ノルウェイの森)
- 18)' “一旦革命成功, 我们难保不会被吊到电线杆上去, 嗯?”
- 19) 私は若々しいと云われても、馬鹿気していると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思っている。(こころ)
- 19)' 所以不管会被人家说成稚气也好, 会被人家当傻瓜耻笑也好, 我觉得能够预见到这点的我的直觉, 总之是既可靠、又可喜的。
- 20) 二人の恋の許可不許可も問題に上ったが、それは今研究すべき題目でないとして却けられ、当面の京都帰還問題が論ぜられた。(布団)
- 20)' 是否同意两人的爱情, 这虽然是个问题, 但并不是眼下值得研究的题目, 因而被搁在一边, 眼下主要是讨论回京都的事。

以上は「被」構文に訳された例である。介詞「被」の意味はもともと動詞としての「被」の意味「蒙る、意外的な遭遇」から発展してきたものであるため、中国語の「被構文」は、不幸や不愉快を表すのが一般的である。つまり、主語が損害や不愉快なことに見舞われる場合、主に「被構文」が使われる。(14)'、(15)'、(16)'、(17)'、(18)'では、(14)、(15)、(16)、(17)、(18)の原文は、「置き去りにされる」、「だまされる」、「掠奪される、破壊しつくされる」、「けがされる」、「吊される」など被害を受けたことを表しているため、「被構文」が使用されていると考えられる。また、(19)'、(20)'の例が「被構文」となっているのは、使用されている動詞が、「耻笑」(笑う)、「搁在一边」(却ける)、などマイナスのイメージを想起するものであるためだと思われる。

- 21) そういう人なんだよ。そういう人は世間では尊敬されるのさ。(こころ)
- 21)' 他就是这样的人, 而这样的人才会社会上受到尊敬。
- 22) 女はやはり生れはこの雪国、東京でお酌をしているうちに受け出され、ゆくすえ日本踊の師匠として身を立てさせてもらうつもりでいたところ、・・・(雪国)
- 22)' 女子却意外坦率地谈起自己也是生长在这个雪国, 在东京的酒馆当女侍时被人赎身出来, 本打算将来做个日本舞蹈师傅用以维持生计, ……
- 23) 冬の午後の薄光りはその地中の闇へ吸い取られてしまったかのうように、・・・(雪国)
- 23)' 只见冬日下午淡淡的阳光像被地底下的黑暗所吞噬, ……
- 24) 一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれてしまった。(ノルウェイの森)
- 24)' 一度被捆得结结实实的我的行李, 不记得在什么时候已经打开了。

(21)'、(22)'は受益、(23)'、(24)'は中立の意味を表わす「被構文」に訳された例である。被害の意味を表わす用例に比べるとかなり少ない。受益の用例はわずか9例しかないが、主語が全部有情物である。それに対して、中立の意味を表わす「被構文」の多くは非情物主語である。

表5 「被構文」に訳された「動作主なし」の直接受身文の意味特徴

意味特徴 対訳文	被害、迷惑	受益	中立
有情物主語	76	9	6
非情物主語	30	0	21
合計	106 (74.7%)	9 (6.3%)	27 (19.0%)

表5が示したように、「被構文」に訳された142例のうち、被害、迷惑の意味を表わすのは106例あり、74.7%を占め、圧倒的に多い。したがって、「被害」の意味を表わすことは日本語受身文の中国語の「被構文」に訳される重要な条件の一つであると言えよう。

4.2.2 意味上の受身文に訳された場合

中国語の意味上の受身文について、劉月華他(1991)は「意味上の受動文は主語が動作の受け手であり、多くは事物なので、普通の述語動詞が表す動作を行うことができず、仕手と誤解されることが無い。(中略)主語が人や動物の表す動作は行い得ないことが文脈から明らか

であって、やはり動作の受け手でしかありえない⁴と述べている。意味上の受身文に訳された「動作主なし」の直接受身文を、さらに、主語が有情物か非情物かで分類した。その結果を次の表6にまとめた。

表6 意味上の受身文に訳された「動作主なし」の直接受身文の主語分類

主 語	有情物	非情物
訳 文		
意味上の受身文	3 (2.2%)	134 (97.8%)

表6から分かるように意味上の受身文に訳された用例が137例あるが、そのうち「有情物主語」、すなわち主語が人や動物の用例はわずか3例しかない。

25) 日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいう言伝えになっているのです。

(こころ)

25)' 相伝在日蓮诞生那天，有两尾鯛鱼打上了海岸。

26) 座敷の中をぐるぐる廻らなければいられなくなったのです。檻の中へ入れられた熊の様な態度で。

(こころ)

26)' 我耐不住在房间里绕着圈儿走个不停，有如关在笼子里的狗熊一样。

27) 見ると、なるほど、窓際の小さい卓の上に、果物の空かごに赤いリボンで縛られた子犬が坐っていた。

(あした来る人)

27)' 一看，果然窗口边小桌上的空果篓里，蹲着那条拴着红线绳的小狗。

以上の3例のほか、中国語の意味上の受身文に訳された例文がみな「非情物主語」である。次の例文を見てみよう。

28) 机の上にはモウパッサンの「死よりも強し」が開かれてあった。

(布団)

28)' 莫泊桑的小说《如死一般强》展开在桌子上。

29) その虫除けの金網も取りはずされた。虫の声がめっきり寂れた。

(雪国)

29)' 防虫的纱窗已经取了下来，虫声明显地变得稀落了。

30) 東京へ帰って見ると、松飾はいつか取払われていた。

(こころ)

30)' 回到东京一看，人家门口的松饰不知在什么时候已经撤除。

31) 玄関の戸が内からひらかれた。もうかなりの、五十歳を超したくらの、頭の禿げた小柄なおじ

さんが、派手なパジャマを着て、へんな、はにかむような笑顔で私たちを迎えた。

(斜陽)

31)' 大门从里边打开。一个年近六十的秃顶矮老头穿着一身华丽的睡衣，脸上露着奇怪的害羞笑容出来迎接我们。

32) 新発見にしても、新学説の樹立にしても、過去に、もし同種の研究が発表されていれば、それは新発見とも新学説とも言えない。

(あした来る人)

32)' 新发现也好，新学说的确立也好，倘若过去已有同类研究成果发表，就不能称之为新发现、新学说。

中国語の「意味上の受身文」は、「主語+動詞」という語順になっており、動詞の動作・作用を受ける対象が主語に置かれている構文である。(28)'では“莫泊桑的小说”(モウパッサンの小説)が、(29)'では“防虫的纱窗”(虫除けの金網)、(30)'では“松飾”(松飾)、(31)'では“大门”(玄関の戸)、(32)'では“同类研究成果”(同種の研究)が主語に置かれ、それに動詞が続いている。これは、動作や作用を受ける対象が主語に来るという日本語の受身文の構造と共通している。また、「意味上の受身文」は、被害的な事柄を表すという性質はなく、主語に焦点がある表現であり、「非情物主語」の直接受身文との共通点が多いため、用例数も137例(22.6%)があると思われる。

5 おわりに

本稿では、「動作主なし」の直接受身文について、対応する中国語表現を見てきた。全体として、「動作主なし」の直接受身文は中国語の受身文、能動文に対応する割合がほぼ五分五分であることが明らかになった。日本語は不特定な動作主の省略によって使われる受身文が中国語に訳すとき、日本語の原文に示されていない動作主を、主語として補ってまで能動文に訳している例が少なくない。このことから、日本語と中国語では、表現形式が異なることが明らかとなった。また、中国語の「被構文」と対応した場合、「被害」の意味を表わすことは重要な条件の一つである。さらに、日本語の「動作主なし」の直接受身文は「非情物主語」(つまり「無生物」や「植物」などを行為の受け手とする)受身文で、「中立的」意味が含まれるものが多い。中国語の意味上の受身文は、行為の受け手の多くが「無生物」で、文の多くが「中立的」意味を表わすという特徴を持っている。つまり、日本語の「非情物受動者」の直接受身文は中国語の意味上の受身文の特徴に近い。中国語に訳すとき、意味上の受身文がよく用いられる。

- 1 劉月華他 (1991) によって、中国語の受動文には「被」、「叫」、「让」、「给」といった受動マーカ―を用いる「被动句」(受動文)とそういった受動マーカ―を用いない「意义上的被动句」(意味上の受動文)とがある。
- 2 本稿における「意識」とは、日本語の原文と構造が全く異なり意味だけを対応させたものの他、受身表現に該当する部分が中国語で欠落している「不訳」、中国語訳が動詞文ではなく、形容詞文や名詞文などに訳されているものも含む。
- 3 劉月華他 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 PP. 643参照。
- 4 劉月華他 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 PP. 642-643参照。

- 楊凱榮 (1988) 「文法の対照的研究—中国語と日本語」『講座日本語と日本語教育 5 日本の文法・文体 (下)』 明治書院
- 姚莉萍 (2002) 「中国語と日本語の受身の構文と意味についての比較」『中日対訳語料庫的研制与应用研究論文集』 外語教学与研究出版社
- 葉菁 (2003) 「日中受動文の対照研究：『新編日語』における文法説明への提案」『早稲田大学日本語教育研究』

参考文献：

- 飯嶋美知子 (2007) 「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究—国語母語話者への教育の一環として—」『早稲田大学日本語教育研究』
- 大河内康憲 (1982) 「中国語の受身」『講座日本語学10』 明治書院
- 木村英樹・楊凱榮 (2008) 「授与と受動の構文ネットワーク—中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試論」『ヴォイスの対照研究：東アジア諸語からの視点』 くろしお出版
- 阪田雪子 (1980) 「受身を表す言い方」『教師用日本語教育ハンドブック④文法II』 凡人社
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
- 仁田義雄 [編] (1993) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- 松村明 (1971) 『日本文法大辞典』 明治書院
- 森田良行 (1971) 「受身・使役の言い方」『講座日本語教育 9』
- 陳昌来 (2000) 『現代漢語句子』 華東師範大学出版社
- 劉月華・潘文娛・故韡 (1983) 『实用現代漢語語法』 外語教学与研究出版社
- 劉月華・潘文娛・故韡 (2001) 『实用現代漢語語法 (増訂本)』 商務印書館
- 劉月華他 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 くろしお出版

A Contrastive Analysis between the Japanese and Chinese Passive Voice: Focusing on the Direct Passive without Agent

Jia MEI

Abstract:

In the Japanese language, the passive is one of the voices and constitutes a grammatical category. There is no concept of voice in Chinese, where the passive is expressed only by means of functional words and word order. This difference causes a great difficulty to Chinese learners of Japanese. It is important for Japanese teaching and translation to research how to use passive voice in Japanese properly. Therefore, the writer of this article, through empirical study, makes a contrastive analysis of Japanese sentences which include direct passive with no agent, and their Chinese translations taken from a Chinese-Japanese corpus. The writer will attempt to define the differences in the use of passive in Japanese and Chinese, as well as explore the degree to which those uses correspond to each other. The writer attaches importance to the practicability of the research and hopes that it will be applied to Japanese-Chinese translation and the teaching of the Japanese language.

Key words: passive voice with no agent, active voice, *by*-structure, active-passive.